

ゲルマン語における王の名称

丑 田 弘 忍

1. はじめに
2. 印欧語における王の名称
3. ゲルマン語における王の名称
4. 印欧語 *rēg- はゲルマン語にいかにあられるか
5. なぜ *kuningaz はゴート語にあられないのか
6. 補遺とまとめ

1. はじめに

古英詩「ベオウルフ」第35歌に老いた王ベオウルフが過去を回顧して次のように語る個所がある。

..... Ic genēðde fela gūða on geogoðe. Gýt ic
wylle, frōd folces weard, fæhðe sēcan, mærrðu fre-
mman, gif mec sē mánscēaða of eorðsele ūt gesēceð.
(2511~2515)

「われは、若きより、多くの戦争にたずさわって来た。老いても、国民の守り主として、もし悪を行う者が地下からわれに攻撃をしかけてくるならば、それと戦い、誉れをなしとげよう」(大場訳)

この言葉の中に王（支配者）たる者の理想像が描かれていよう。古来よります第一に民を保護し、民に豊饒をもたらし、善をなすのが王の義務であつたろう。第二に、王は軍事指揮者として誰よりも先頭に立って戦い、

民を敵から守り、民に平安 (Heil) をもたらさなければならなかったろう。戦争の勝敗、作物の出来、不出来はひとえに王に帰せられたからだ。また中高ドイツ語の叙事詩「ニーベルンゲンの歌」にも王の役割について、同様の事が述べられている。

«Ez zæme», sô sprach Hagene, «vil wol volkes trôst,
daz die herren væhten z'aller vorderôst,
alsô der mînen herren hie ieslîcher tuot.
die houwent durch die helme, daz nâch swérten vliuzet
daz bluot» (2020)

「王者たるものは」ハゲネが言い出した。
「一軍の先登に立って戦ってこそ民の守護者たるにふさわし
からう。
わが主君がたは皆そのようにこの場で戦われ、
兜に切りこみ、剣に従って血が流れているのだ。」(相良訳)

この一行目の *volkes trôst* 「民の守護者」にあらわれた *trôst* は先の「ベオウルフ」の *folces weard* (= *Wart des Volks*) の *weard* (ドイツ語 *Wart* と同源) と異なって、現代語の感覚からすれば一見奇異に思えるかもしれないが、古くはこれには現今の「慰め」の意味はなかった。この *trôst* は原ゲルマン語の **trausta-* にさかのぼり得、その意味するところは「固い」であった、それより「信頼、保護、援助」等の意味に発展した。現今の「慰め」の意味はラテン語 *consolatio* のキリスト教的な意味の影響を受けて古高ドイツ語時代に生まれた。従って、*volkes trôst* は「ベオウルフ」の *folces weard* と形式においても意味においても全く一致している。このように古代ゲルマン社会においては、王には民の守護者としての面が強く出されていた。それは恐らく宗教的権威に基づいていた聖王としての要素であったろう。これはひとりゲルマン語族のみならず、ひろく印欧語族に見られるものである。例えば「オデッセイア」の次

の個所はそれをよく物語っている。「奥様方，広いこの世であなた様の悪口を申せる者は一人もおりますまい。あなた様のお名は，神を畏れ，多くの逞しい人々を治め，正義を保ち，その善政のゆえに黒い大地は小麦や大麦をみのらせ，木々には実がたわわになり，羊は仔を生まぬこととてなく，海は魚を与え，民はその下に富み栄える聖王の名のように，広いみ空にまでとどろきわたっています」(XIX, 109-113) (春津訳)

以上のような古代社会における王の機能を念頭に置き，以下に，主にゲルマン古方言にあらわれる王の名称をそれぞれの初期の作品，「ウルフィラ」，「エッダ」，「ベオウルフ」，「ヘーリアント」，「ターチアン」を中心に，それらの意味するところを合わせて考えてみよう。

2. 印欧語における王の名称

印欧語の古代語における王を意味する語がどのように表わされているか，手元の Carl Darling Buck の *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages* (1949) の King の頃から古代語のみを拾い上げてみよう。

ギリシア語	<i>βασιλεύς</i> (<i>ἄναξ</i> 詩語)
ラテン語	<i>rēx</i>
アイルランド語	<i>rī</i>
ゴート語	<i>þiudans</i>
古ノルド語	<i>konungr, þjóðann</i>
古英語	<i>cyning, þēoden</i>
古高地ドイツ語	<i>kuni(n)g</i>
教会スラヴ語	<i>cěsar'ŭ, kral'ŭ</i>
サンスクリット語	<i>rājan-, rāj-</i>
アヴェスタ語	<i>xšaya-</i>

以上の如く，各語派にあらわれた語はまちまちで一定せず，王を意味す

るといわれている原印欧語語根 **rēg-* に由来するとみられる語はラテン語、ケルト語、サンスクリット語にあらわれる形だけである。音法則的に原印欧語 **ē* はラテン語において *ē*, ケルト語において *i*, インド・イラン語において *ā* となる。従ってこの三つの語は同じ語根に由来していることがわかる。

なぜ王のような社会組織の上で最も基礎的な語が原印欧語根を持ちながら、くまなく一様にすべての語派にあらわれないのであろうか。これに対して、仮設的にこう言えるのではなからうか。原印欧語の時代には一貫して **rēg-* であったが、各語派が分出するに至って各語派において、原印欧語の **rēg-* が有していた意味の王とは異なった機能の王が現出し、そこで新しい機能にふさわしい語が作り出され古い語を駆逐したであろう。もちろんそれは各語派によって事情は異なっていたであろう。

では **rēg-* に由来しない王を表わす各語はいかなる意味を持っているであろうか簡単に記しておこう。

ギリシア語の *ἄναξ* も *βασιλεύς* もその語源は定かではない。*ἄναξ* は紀元前1200年頃のミュケーナイ文書にあらわれ、王、神をあらわしていた。*βασιλεύς* は元々小役人程度の意味であったが、王の意味に良化された。では **rēg-* は全くギリシア語にあらわれていないのか。ギリシア語の動詞に *ῥέγω*「伸ばす」、*ῥήγω*「助ける」という語があるが、その語根部分 *-ρέγ-*, *-ρήγ-* は、原印欧語 **e* は *ε*, **ē* は *η* となるので、それぞれ **reḡ-*, **rēḡ-* に由来することは確実である。実に他の動詞に **rēḡ-* の痕跡が見られる。

教会スラヴ語 *cěsar'ī* がローマ皇帝 *caesar* よりの借用語であることは素人目にも明らかである。もう一つの *kral'ī* は Buck によれば、古高地ドイツ語 *karl* (カール大帝) からの借用で、カール大帝がスラヴ諸族との戦いで、彼らの間で知れ渡ったとしており、別の見解であるやはり古高地ドイツ語 *karl*「男」からの借用とする説をしりぞけている。スラヴ語において王を表わす語がおしなべてかなり後の時代での外国語からの借用とすれば古くはスラヴ社会独自の王制は存在していなかったのであろうか。

アヴェスタ語の *xšaya-* は Buck によれば、サンスクリット語 *ksi* 「所有する」と同根の *xši-* 「力を有する者」の意である。従って王は「力を有する者」の意である。ひるがえって、**rēg-* は、その **ē* はアヴェスタ語では *ä*, **g* は *ǵ* となって、全体で *rāz-* となり、派生語 *razurā* 「森」, *rāzarə* 「命令」などにあらわれている。

ゲルマン語については後に検討するとして、**rēg* を語根とする王をあらわす語を有していない語派において、少なくともギリシア語とアヴェスタ語においてはその痕跡がうかがえる。恐らく王を意味する **rēg* は新しい語に取って代わって、派生語の内にのみ留まってしまったであろう。

では一体この **rēg* はその本質においていかなる意味を有していたのであろうか。十九世紀の印欧言語学は王の意味として、印欧共通語根 **rēg* を再建したが、そもそもこの **rēg* は動詞語根 **reǵ* (ラテン語 *regere* に明瞭にあらわれる) の延長階梯による *nomen agentis* と言える。A. Walde, J. Pokorny, J. Gonda, C. Watkins などの印欧語学者は **reǵ* に “gerade, gerade richten, lenken, recken, strecken, aufrichten (auch unterstützend, helfend): Richtung, Linie etc” (Walde, Pokorny), “(sich aus) strecken” (Gonda), “move in a straight line” (Watkins) の意味を与えている。即ち「ある一定の方向に伸長する(させる)」ということであり、ラテン語 *regere* はその原意においても、加うるに比喩的な意味においても「まっすぐに伸ばす」であったが、ラテン語内において、「向ける」→「導く」→「支配する」とその意味を発展させた。特に J. Gonda⁽¹⁾ はギリシア語、古代インド語を引き合いに出し、王の本質、すくなくともその重要な因子は「助力者」及び「神と人との仲介者」という宗教的な意味を有している、としている。**rēg-* は「国の支配者」の意味ではなく、「仲介者」及び「保護者」の意味である。従って “*rēg-* は「(守護しながら、援助しながら、与えながら、祝福しながら) 自分あるいは自分の腕をさし伸ばし (*ausstrecken*) かつ自分の力 (尊厳, 富) を国土と民の上に広げる (*ausbreiten*) 仲介者」である、としている。ここに **reǵ-* の意味 “*ausstrecken*” が明瞭にあらわれている。Gonda

の見解の新しさは、従来の解釈である「まっすぐに伸ばす」→「正しく導く」→「支配する」という *reġ の意味の発展ではなく、「伸ばす」→「保護する」→「支配する」という発展を想定し、ここに宗教的要素を加味した点にある。

これらの従来の説に対して A. L. Sihler 及び J. Trier は異説を唱えている。Sihler⁽²⁾ は *reġ- の意味が「伸ばす」にあることは認めはするが、*rēġ は reġ の延長階梯ではないとする。いわゆるラリンガル説(laryngal theory)によって、*rēġ-を *reH₁ġ- と仮定し、これに “be efficacious” “have mana” の意味を与えている。従って、ギリシア語の ἀρῆγω「助ける」の意味の解釈も成り立つとしている。しかしながら、ἀρῆγω も Gonda 流の解釈において *rēġ-「腕を人を助けるために伸ばす人」からの派生による意味の転用と考えるならば、さほど困難な解釈とはいえまい。

J. Trier は *reġ に「垣」「垣をめぐらす」の意味を与えているが、これについては後に述べよう。

3. ゲルマン語における王の名称

先に Buck の King の項から拾い上げたが、「王」を広く「支配者」と解するならば、king の類語として master, prince, などが考えられるので、Buck からそれぞれギリシア語、ラテン語、古代ゲルマン方言のみを挙げてみよう。

master

ギリシア語	δεσπότης, κόριος
ラテン語	dominus, erus
ゴート語	frauja
古ノルド語	dröttinn
古英語	hlāford, drihten
古高地ドイツ語	hērro, truhtin

prince

ギリシア語	ἄρχων
-------	-------

ラテン語	princeps
ゴート語	reiks
古英語	ealdor
古高地ドイツ語	furisto, hērīsto

ゲルマン古方言における主な王の名称を整理すると次の表1の如くなるであろう。

表1 古ゲルマン方言における王の名称

相応する ラテン語	(rex)	(rex)	(princeps)	(dominus)	(dominus)
ゲル マン語					
ゴート語	þiudans		reiks	(drauhtiwitoþ)	frauja
古ノルド語	þjóðann	konungr	(rikr)	dröttinn	(Freyr)
古英語	þēoden	cyning	rica	dryhtin	frea
古高地ドイツ語	(diot)	kuning	(rīhhi)	truhtin	frō
古ザクセン語	thiodan	kuning	(rīki)	druhtin	frō frōiō

大きく分けて5つの種類に分類出来るが、使われ方における意味の相違、時代の相違はどのようなであろうか。

まずラテン語 *rex* に相応するゴート語 *þiudans* は本来どのような意味をもっていたのであろうか。*þiudans* をさかのぼれば、印欧語根 **tēu-* 「膨れる」、語幹 **teutā* 「人民」に達する。原ゲルマン語 **þeuðo* が推定され、ゴート語 *þiuda*, 古高地ドイツ語 *diot*, 古ノルド語 *þjóð*, 古ザクセン語 *thiod* としてあらわれ、その意味するところはすべからく「民」である。この **þeuðo* に接尾辞 *-na-z* が加わって **þeuðanaz* となったと推定される。この *-na-* は集団への人の帰属を表わし、結果的に全体で集団の長、即ち *primus inter pares* 「同類の中の長」の意味である。⁽³⁾ 従

って **peudanaz* は原意において「民の首長」の意味であろう。

ゴート語, そのウルフィラにあらわれる *þiudans* は約30例で *βασιλεύς* の訳として用いられ, *Vulgta* ではその個所はすべて *rex* としてあらわれる。特にユダヤ人の王, つまりキリストに用いられるが, ヘロデ王やアルタシスタ王などの世俗の王にも使われている。ヨハネ XIX, 3: *hails þiudans Iudaie!* (キリスト), マルコ VI, 22: *þiudans du þizai manjai* (ヘロデ王), ネヘミヤ V, 14: *jah anþar Artar[ra]ksairksaus þiudanis* (アルタシスタ王), マタイ XI, 8: *in gardim þiudane sind* (一般の王)。この *þiudans* は明らかにラテン語の *rex*, ドイツ語の *König* に相当する一民族の支配者としての王である。ちなみにこれらはルター聖書では *König* で訳されている。古ノルド語の *þjóðann* は詩語にしか用いられず, 「エツダ」には8例しかあらわれない。Frágo frœcnan, ef fiqr vildi, / Gotna þjóðann, gulli kaupar 「彼らは猛きゴートの王に, 黄金で生命をあがなうつもりはないか, たずねた」⁽⁴⁾ (グリーンランドのアトリの歌20), þagalt oc hugalt scyli þjóðans barn/oc vigdiarft vera 「上に立つ者の子は, 無口で思慮深く, 戦いにさいしては勇敢でなければならぬ」(オーディンの箴言15), mikil er sá maðr ungr á mars baki, / vill nú, þjóðann, við þic tala 「王よ, 若者は威風堂々と馬にまたがり, あなたさまとお話したいと望んでいます」(フン戦争の歌4), Til annars vér hingat fórom, enn ql at drecca, eða þiggja, þjóðann, þinar veigar 「王よ, 麦酒を飲んだり, あなたの酒を受けるのとは違った用事でここに参ったのです」(同上7)。エツダの時代には *þjóðann* はすでに衰えて, これに代って *konungr* が頻出する(「エツダ」では *konungr* は約110例)。エツダにあらわれる *þjóðann* は固有名詞に冠せられることなく, 不特定の王や呼びかけに用いられており雅語的な色彩を表わしている。古英語の *þeoden* は「ベオウルフ」に好んで用いられていて(39例), しばしば *mære* 「名高い」, *rice* 「勇ましい」, *þrīsthȳdig* 「勇ましい」などの称讃の形容詞が冠せられている。やはり *þeoden* は古英語において徳高い優れた王の場合に使われている。古ザクセン語の *thiodan* は「ヘーリアント」

に23例見られ、たいていキリストに用いられている。世俗の王には **kuning** が多く用いられていて、**thiodan** の方はやはり雅語的と言えよう。古高地ドイツ語には **biudans** に対応する語は文証されていない。これに代わる語は **kuning** であろう。恐らく共通ゲルマン語の時代には古高ドイツ語の地域でも、少なくとも2, 3世紀頃までは ***biuðanaz** が **rex** の意味で広く用いられていたであろう。そして新しい語 **kuning** が今のドイツの地で誕生し、北へ西へと広がっていったであろう。8世紀—10世紀の「エッダ」や「ベオウルフ」の時代には、北ドイツや北欧、イギリスでも古い語 ***biuðanaz** は徐々にすたれていき、文学の世界にのみ残存したであろう。

ゴート語の **draúhtiwitoþ**「出征」は **draúhti** と **witoþ** の合成語である。**draúth-** は原ゲルマン語 ***druhti-** にさかのぼり、その原意は「従士、群」である。これは古ノルド語 **drótt**, 古英語 **dryht**, 古高地ドイツ語 **truht**, 古ザクセン語 **druht** としてあらわれる。この ***druhti-** に帰属を表わす接尾辞 **-na-** が加わって、***druhtinaz** となり、古ノルド語 **dróttinn**, 古英語 **dryhten**, 古高地ドイツ語 **truhtin**, 古ザクセン語 **druhtin** としてあらわれ、その意味は「従士の主人である」。古ノルド語の **dróttin** は「エッダ」に16例見い出され、軍神トールや、戦いに優れた王たちに使われている。**hafra dróttin**「山羊の主人＝トール」, **scatna dróttin**「戦士らの王」, **seggia dróttinn**「戦士らの王」, **gumna dróttin**「戦士らの王」など。古英語の **dryhten** は「ベオウルフ」に27例見い出され、神にも用いられている。**Geata dryhten**「ゲアータの君」, **Eorla dryhten**「貴人たちの君」, **wigtig dryhten**「賢明なる神」など。古ザクセン語の **drohtin** は「ヘーリアント」において一例(**erlo drohtin**「貴人たちの主人」)を除いて、神とキリストのために転用されている。これらの用法はやはり原義的に複数の人々の長(複数属格形+ **dróttin**)の色合いが濃い。古高ドイツ語の **truhtin** は早くは「ヒルデブラントの歌」の中に、**Hûneo truhtîn**「フン人の王＝アッティラ」の如く、上記の様に使われるが、「ターチアン」になると **truhtîn** は2, 3例を除いて神やキリストに用いられていて、世俗の王に使われることはない。ノトカーにおいてはますますそ

の傾向は強まる。元々軍事指揮者としての **druhtinaz** が王の名の地位を得るにはさして困難ではなかったろう。王たる者は戦時の際、人々の先頭に立って戦うのがその使命であったろうから。この語がゴート語には存在していないところから、西ゲルマン内の従士制度の賜物であったかもしれない。

ゴート語 **frauja** は、原印欧語にさかのぼれば、語根 ***per-**、その零階梯の語幹 ***pro-uo-** が推定される。その意味は「前に」ぐらいだった。それが前に立つ者、即ち首長の意味になったろう。今日のドイツ語 **Frau** は実にこの女性形である。これより古ノルド語 **Freyr**、古英語 **frēa**、古高地ドイツ語、古ザクセン語 **frō** があらわれる。ゴート語の **frauja** は「ウルフイラ」にあってはギリシア語 **κύριος, δεσπότης** の訳としてあらわれ、ラテン語 **dominus** に相当し、一家の主人（奴隷、妻、子に対する）、さらに高められて専ら神やキリストに用いられている。世俗の王には用いられていない。古ノルド語の **Freyr** は原意においてあらわれることなく、豊穡と平和の神フレイとしてのみあらわれる。王の機能として民を保護し、土地を豊かにすることがあげられるので、そういう神はフレイの名を得たのであろう。「エッダ」の中で、**Freyr** は **folcvaldi goða** と呼ばれている。前の語は **folc** (=Heer) + **valdi** (=Herrscher) と分析され、全体で **Heerführer der Götter** となり、首位者としての原初的な意味があらわれている。古英語の **frēa** は「ベオウルフ」に16例見られ、世俗の王（特にデネの王）にも神にも用いられている。**Swylce þær Unferþ byle æt fotum sæt frean Scyldinga** 「代官ウンベルスもシュディガスの足許にすわっていた」(1166), **fēran on frēan wære** 「主のご加護の所へ逝った」(27)。古高ドイツ語の **fro** は「オトフリート」, 「ルードヴィヒの歌」, 「ペトルスの歌」にしかあらわれない。それも呼びかけの形で神に局限されている。古ザクセン語の **frō** も「ヘーリアント」で神やキリストにのみ使われている。

残った重要な **reaks** と ***kuningaz** については次に述べよう。

4. 印欧語 *rēǵ- はゲルマン語にいかにあられるか

ゴート語の *reiks* (リークス) と語根を同じくするのは古ノルド語 *rikr*, 古英語 *rice*, *rīca*, 古高地ドイツ語 *rīhhi*, 古ザクセン語 *rīki* などである。今日のドイツ語 *Reich* はここに由来するとされている。

ゴート語の *reiks* はウルフイラではギリシア語 *ἄρχων* の訳として用いられている。ヨハネ XII, 31: *sa reiks þis fairhaus* (悪霊), ヨハネ VII, 26: *þai reiks þatei sa* (役人), ローマ XIII, 3: *þai auk reiks ni sind* (支配者), マタイ IX, 18: *þaruh reiks ains* (会堂司) など, この *reiks* は神やキリストに使われることなく, *þiudans* よりも低く悪い意味で使われている。新約ギリシア語の *ἄρχων* 自体 *βασιλεύς* よりも低い地位を表わしていることは次の使徒行伝の一節からも明らかである。
παρέστησαν οἱ βασιλεῖς τῆς γῆς καὶ οἱ ἄρχοντες συνήχθησαν ἐπὶ τὸ αὐτὸ κατὰ τοῦ κυρίου καὶ κατὰ τοῦ χριστοῦ αὐτοῦ. 「地上の王たちは, 立ちかまえ, 支配者たちは, 党を組んで, 主とキリストとに逆らったのか」(使徒行伝 IV, 26)。この個所はウルフイラにはあられないが, もしこの *ἄρχων* が訳されていたならば, *reiks* となっていたであろう。しかし「ベオウルフ」にあられる, *se rīca* は悪い意味ではなく, 王の意味で用いられている。また古ザクセン語の形容詞 *rīki* も「力強い」などの意味を持ち, 「ヘーリアント」では *thiodan*, *drohtin*, *rādgebo*, *kuning* などの付加語としてあらわれ, 皇帝, キリスト, 神などの属性として用いられている。
rīki thiodan (皇帝), *rīki rādgebo* (キリスト), *rikiumu drohtine* (キリスト), *cuning rīkeost* (キリスト) など。このようにゲルマン語内部において意味と品詞が一定していない。

ではこの **rik-* は何に由来するであろうか。今まで主に二通りの解釈がなされている。一つは, A. Walde, J. Pokorny, H. Krahe, S. Feist などの多くの印欧学者により支持されている伝統的な解釈で, **rik-* を原印欧語根 **rēǵ-* に由来するケルト語 *rīg-* からの借用と考える。さらに **g* が *k* に変化していることから, 第一次子音推移以前の借用としている。仮に

*rēġ-からの直接の遺産であるならば、原印欧語語根母音 *ē はゴート語では ē となり、西、北ゲルマン語では ā となるので、それぞれ rēk, rāk となっていなければならないはずである。他の説はケルト語からの借用を否定するものである。それには J. Trier⁽⁶⁾ がまず挙げられる。彼は印欧語根 *reġ を「垣」と想定し、民会に輪になって参加する男たちは一種の垣を形成するとし、それより政治的な意味を持つようになったと説明する。その際 *e> i はケルト語からの借用ではなく、ケルト語の影響であるとし、ゲルマン語内で *reġ と *reiġ が融合したと推定している。なお P. v. Polenz⁽⁶⁾ は印欧語根 *reiġ からゲルマン語 *raikjan を導き出し、*rīkja を *raikjan のアプラウトとする。本来これは „Bereich“ の意味を有し、政治的な意味に使用されるようになり、現在の Reich の意味になったと推定する。私にはケルト語借用否定説は牽強附会のきらいがしてならない。恐らく *rēġ は *reġ と共にゲルマン語に入ったにちがいない。一方の *reġ はドイツ語の Recht, 英語の right にあらわれている。しかし *rēġ はゲルマン語から失なわれてしまい、ケルト人との接触によって再びゲルマン語に取り入れられたであろう。そのため意味と形において統一がとれていないであろう。

5. なぜ *kuningaz はゴート語にあらわれないのか

今日の英語、ドイツ語で王を表わす最もポピュラーな名称は king, König であるが、これは古ノルド語 konungr, 古英語 cyning, 古高地ドイツ語 kuning, 古ザクセン語 kuning であり、原ゲルマン語 *kuningaz が推定される。これは kuni(u)-i(u)nga-z に分析され得る。この kuni の部分を原ゲルマン語の形に戻せば *kunja となり、ゴート語 kuni, 古ノルド語 kyn, 古英語 cynn, 古高地ドイツ語 chunni としてあらわれ、「種族、門地、子孫」などの意味を有し、ラテン語 gens に対応する。さらにこの部分を印欧語にさかのぼるならば、k < *g によって語根 *gen- が導き出される。これは「生む、生ませる」の意味を表わした。実際に *e は弱化され、nomen agentis を表わす接尾辞 -io- が加わり、語幹 *gŋ-

io- が形成され *kunja が生じるに至った。「生まれる」の意味はそれが永続的・反復的となり、「一門、子孫」の意を表わすに至った。kuni-(i)unga-z の第二の部分 -(i)unga- は帰属をあらわし、全体で「門地に帰属する人」の意味となろう。ゲルマン族にあっては、各部族は同族の集まりと考えられていたからそれは「族の首長」の意味であって、従来より考えられているように「高貴な家柄の男」ではないであろう。実際にはタキトゥスが述べている如く、同族の中の始祖に近い家系から王が選ばれたであろう。それは *kuningaz の原意に等しい。まさしく *piudans* と同じく *primus inter pares* なのである。ここに *piudans* に代って *kuningaz が優勢となった。では実際にこの *kuningaz はどのように使われているであろうか。

古ノルド語 *konungr* は「エツダ」ではすこぶる多く、あらゆる王に用いられている。古英語の *cyning* は Bosworth の辞書によれば、広く世俗の王にも、神やキリストにも、また悪魔にも用いられている。*Saul wæs gecoren ærest to cyninge on Israhéla þeode* 「サウルはイスラエルの民の初代の王に選ばれた」(Ælfc. T. 13, 3), *Crist is ealra cyninga Cyning* 「キリストはすべての王の王」(Homl. Th. ii, 588, 9), *Hellwavena cyning* 「地獄の住者たちの王」(悪魔) (Exon. 70a). これはゴート語の *piudans* と *reiks* の合さった如き意味を有している。古高ドイツ語には *piudans* に対応する語がないため、*kuning* は *rex* にふさわしい意味としてあらゆる文献にあらわれる。古ザクセン語の *kuning* は「ヘーリアント」でも61回使われており、*thiodan* よりも広く、世俗の王にもキリストにも神にも使われている。*Salomon the cuning* (1675), *Crist cuning eunig* (3059), *kuning thie bezto* (134) (神), *slīdmôd cuning* (630) (ヘロデ王) など。

この *kuningaz はゴート語にはあらわれない。これは全く地理的な理由によるにすぎないと思う。ゴート族の原郷は、ゴート人 *Jordanes* が551年に著わした „*De origine actibusque Getarum*“ の中で北欧であると伝えている。さらに古ノルド語とゴート語の間に見られる共通点⁷⁾ から

も、ゴート族の原郷は北欧であると見なしてほぼ間違いなからう。しかし紀元前後には北欧の地を去り、ヴァイクセル河下流の現ポーランドに移動した。タキトゥスの「ゲルマニア」にあらわれる *Gotones* はこの頃のゴート族である。さらに西ゴート族は200年頃ドナウ河下流に移動している。西ゴート人ウルフィラが聖書を翻訳したのは実にこの地である。E. Schwarz が描いた図1はこのゴート族の移動を明瞭に示している。

さて、**kuningaz* は恐らくゴート族が北欧の地を去ってから、西ゲルマン語内で成立したであろう。しかしそれも紀元後2, 3世紀を下ることはあるまい。なぜならば、紀元後2, 3世紀頃にフィンランド語 *kuningas* に借用されているからである。ともあれ **kuningaz* は **piudanaz* にかわる語として恐らく紀元後1世紀前後に南ドイツの辺りで成立し、定着し、急速にゲルマン族全体に拡大していったと思われる。その頃遠くゲルマンの辺境に居住し、スラヴ族と堺を接していたゴート族にまではこの語は達しなかったであろう。そのため **kuningaz* はゴート族にはあらわれない。

6. 補遺とまとめ

以上、ゲルマン語古方言における王の種々な名称を挙げたが、このほかにもいくつか見られる。古英語では *agenfrēa*, *ealdor*, *eorl*, *folc-agend*, *frumgar*, *heretoga*, *hlaford*, *strengel*, *þengel*, *wealdend*, *wisa* など。古ノルド語では *dolgrǫgnir*, *fyrstr*, *gramr*, *gylfi*, *hertogi*, *hilmir*, *hringbroti*, *hringdrif*, *hǫfðingi*, *iari*, *iofurr*, *lofðungr*, *menvorðr*, *mildingr*, *rǫgnir*, *þengill*, *valdi*, *yngr* など。古ザクセン語では *boggebo*, *orl*, *folkfogo*, *furisto*, *heritogo*, *mēðgebo*, *radgeðo*, *waldand* など。古高地ドイツ語では *herizoho*, *heristo*, *furitso*, *aleuuglto* など。古ノルド語と古英語に特に多いのは豊かな英雄詩のせいかもしれない。この中で古英語の *eorl*, 古ノルド語の *iarl*, 古ザクセン語の *erl* は同源である。元来、貴族を指していたが、幅広く用いられ、王の意味となった。古英語 *þengel* と古ノルド語 *þengill* は同源である。語源は明らかではない。「ベオウルフ」の中で、ベオウルフが一度

だけこう呼ばれている。古英語 *wealdent* と古ザクセン語 *waldand* は同源である。本来原ゲルマン語 * (ga)waldan (ドイツ語 *walten*) の現在分詞である。「ベオウルフ」では世俗の王及び神に用いられている。「ヘーリアント」では専ら神とキリストにのみ使われている。古英語 *heretoga*, 古ノルド語 *hertogi*, 古ザクセン語 *heritogo*, 古高地ドイツ語 *herizogo* は同源である。元々は文字通り *Heer+Zieher* であり, 軍事指揮者の意味であったが, 支配者の意味に良化され, 今日のドイツ語 *Herzog* に至っている。古ノルド語 *fyrstr*, 古ザクセン語 *furisto*, 古高ドイツ語 *furisto* は同源である。ゴート語 *frauja* と同じく原印欧語 **per* を語根として, 「前に」がその原意であり, 「一番目の人」の意となって, 今日のドイツ語 *Fürst* に至っている。

**þeuðanaz*, **kuningaz*, **rik*, **druhtinaz*, **franjan* を各作品において頻度別に整理すると次のようになる。

ウルフイラ

<i>þiudans</i>	<i>reiks</i>	<i>frauja</i>
ca. 30	14	ca. 70

エツダ

<i>þjóðann</i>	<i>kounungr</i>	<i>dröttin</i>
8	ca. 110	16

ベオウルフ

<i>þēoden</i>	<i>cyning</i>	<i>rica</i>	<i>dryhten</i>	<i>frea</i>
39	29	3	29	15

ターチアン

<i>kuning</i>	<i>truhtin</i>	<i>frō</i>
39	157	0

ヘーリアント

thiodan	kuning	druhtin	frō (frōiō)
21	60	235	18 (26)

以上のように **þeuðanaz* と **kuningaz*, **druhtinaz* がことに多い。すべてがあらわれている「ベオウルフ」がそのことをよく物語っている。ウルフィラに *frauja* が多いのは王の意味ではなく、主人の意味に使われているからだ。先にも述べたが、**þeuðanaz* と **kuningaz* はその原意において「民、族の長」であって、**druhtinaz* は「軍事指揮者」であった。

タキトゥスは「ゲルマニア」第7章において, *Reges ex nobilitate, duces ex virtute sumunt, nec regibus infinita aut libera potestas, et duces exemplo potius quam imperio, si prompti, si conspicui, si ante aciem agant, admiratione praesunt. ceterum neque animadvertere neque vincere, ne verberare quidem nisi sacerdotibus permissum, non quasi in poenam nec ducis iussu, sed velut deo imperante, quem adesse bellantibus credunt.* 「彼らは王を立てるにその門地をもってし、将領を選ぶにその勇氣をもってする。しかし王にも決して無限の、あるいは、自由な権力はなく、将領もまた権威によるよりは、むしろみずから人の範たることにより、勇敢に衆に擢んでて、第一戦に立って戦ってこそ、はじめて人々をして嘆美の念を起こさしめて、皆を率いることができる。しかも人を死刑、投獄、あるいは笞刑に処する権限さえ、ただひとりの司祭にのみ許され、あたかもそれは処罰として行なうのでも、また将領の命によって行なうのでもなく、ただかの戦場に戦いつつあるとき、彼らの傍にいますと彼らの考える神の命によって、はじめて行なわれるかのごとくである」（泉井訳）と述べているが、この *rex*こそ **þeuðanaz* 及び **kuningaz* であり、*dux*こそ **druhtinaz* であろう。古代ゲルマン族の王 (**þeuðanaz*, **kuningaz*) は神に出自しているとされる一定の血統 (*regia stirps*) の中から民会によって選ばれ、民会の意志と決定にゆだねられていた。神と民との仲介者として司祭の役割をはた

し、宗教的能力を有していなければならなかった。上のタキトゥスの司祭は王自身が兼ねていたことは十分考えられる。サクソ・グラマチクスには、王に触れると病気がなおるという信仰も伝えられている。民の幸、不幸はひとえに王にかかっていた。もし人民に不幸が生ずれば、それは王のせいにされ、退位させられるか、あるいは殺害されたこともあったと言われている。このような事を Ammianus Marcellinus (ca. 330-ca. 396 ローマの歴史家) が *Res Gestae* 28, 5 の中でこう述べている。 *apud hos (Burgundios) generali, nomine rex appellatur Hendinos et ritu veteri potestate deposita removetur, si sub eo fortuna titubaverit belli vel segetum copiam negaverit terra, ut solent Aegyptii casus ejusmodi suis adsignare rectoribus*⁽⁸⁾ 「彼ら（ブルグント人）の許では、王は一般名で *hendinos* と呼ばれ、もし彼のもとで戦果がぐらついたり、大地が作物の豊饒を拒んだりしたら、エジプト人がこのような場合支配者のせいにするように、昔からの慣習に従って彼は委ねられた権力から離される」。このような王の司祭者的機能はまさしく、Gonda の言う原印欧語 **rēg-* の機能にふさわしいものであろう。恐らく原ゲルマン語の中に **rēg-* は入っていったであろう。そして **þeuðanaz* にとって代わられたであろう。ケルト族との接触によって **rik-* がもたらされたが、少くともゴート語においては **rēg-* の本来の意味を持つことはなかった。**þeuðanaz* の勢力の前に屈したのであろう。その **þeuðanaz* も **kuningaz* に道をゆずることになる。それは王権の強化にあったのかかもしれない。一方元来軍事指揮者の意味であった **druhtinaz* は良化されて、神をも表わしたが次第に *herro* (Herr) に置き換えられ、ドイツ語史の上からすっかり姿を消してしまう。しかし北欧語において、デンマーク語 *drot* ノルウェー語、スウェーデン語 *drott* として支配者の意味を表わし今に伝えられている。

注

(1) J. Gonda: Semantisches zu idg. *rēg-* „König“ und zur Wurzel *reḡ-*

- („sich aus)strecken“. Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiet der idg. Sprachen 73, 1956 S.151-67
- (2) A. A. Sihler: The Etymology of PIE *rēǵ- 'King' etc. Indo-European Studies vol. 5. 1977 p.221-246
- (3) Hans Krahe: Germanische Sprachwissenschaft III S.109
- (4) 以下「エツダ」の訳はすべて谷口幸男訳「エツダ」新潮社による。
- (5) Jost Trier: Vorgeschichte des Wortes Reich Nachrichten von der Akademie der Wissenschaften in Göttingen aus dem Jahre 1943
- (6) P. v. Polenz: Das Wort 'Reich' als unpolitische Raumbezeichnung. Zeitschrift für deutsche Philologie 76. 1957
- (7) ゴート語と古ノルド語との間に次のようないくつかの共通点が見られる。①いわゆる Holzmann's Gesetz (ホルツマンの法則) と呼ばれる jとwの二重音の鋭音化, つまりゲルマン語 -jj->-ddj-, -ggi-, ゲルマン語 -ww->-ggw-, ゴート語 twaddje 古ノルド語 tryggja「忠実」。②女性現在分詞の接尾辞は西ゲルマン語 -jō- に対してゴート語と古ノルド語は -in- である。ゴート語 giban-dei(n), 古ノルド語 gifande, 古高ドイツ語 gebanfiu, 古英語 giefendū。③現在形において接尾辞 -na-, 過去形において -no- をとる。ゴート語 waknan, waknōda, 古ノルド語 wakna, waknaþa。④強変化動詞直接法がゴート語と古ノルド語では -t で終わっているが西ゲルマン語では -i で終わっている。ゴート語 graipt, 古ノルド語 greipt, 古高ドイツ語 grifi, 古英語 gripi, 古ザクセン語 gripi など。これらに関することは E. Schwarz: Goten, Nordgermanen, Angelsachsen, 1951 に詳しい。
- (8) J. Grimm: Deutsche Rechtsaltertümer Bd.I S.319

注以外の主な文献

<印欧語>

Pokorny, Julius: Indogermanisches etymologisches Wörterbuch 2Bde.
Buck, Carl Darling: A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages

Köbler, Gerhard: Neuhochdeutsch-indogermanisches Wörterbuch

<ゴート語>

Streitberg, Wilhelm: Die Gotische Bibel

Schulz, Ernst: Gothisches Glossar

Feist, Sigmund: Vergleichendes Wörterbuch der Gotischen Sprache

<古ノルド語>

Gering, Hugo: Vollständiges Wörterbuch zu der Liedern der Edda

Kuhn, Hans: Edda, Die Lieder des Codex Regius nebst verwandten Denkmälern

Vries, Jan de: Altnordisches etymologisches Wörterbuch

<古英語>

Bosworth, Joseph and T. Northcote Toller: An Anglo-Saxon Dictionary

Nickel, Gerhard: Beowulf. 3 Teile

<古ザクセン語>

Sehrt, Edward H.: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und zur alt-sächsischen Genesis.

Behaghel, Otto: Heliand und Genesis, ATB. 4

<古高ドイツ語>

Sievers, Eduard: Tatian. Lateinisch und altdentsch

Graff, E. G. Altdeutscher Sprachschetz oder Wörterbuch der althochdeutschen Sprache

Braune/Ebbinghaus: Althochdentsches Lesebuch

<その他>

Much Rudolf: Die Germania des Tacitus

Brunner, Heinrich: Deutsche Rechtsgeschichte 2Bde

Myers, Henry A.: Medieval Kingship